

鷲寿司

仙台市立仙台青陵中等教育学校 五年

横山 晴香

祖父が何か言った気がして、俺は宿題の手を止めて、ベッドのほうを見た。

布団をかぶって、遠くを見るような目で中空を見つめる祖父は、口の中で言葉をつぶやいているようである。シャーペンを置いて枕元に行き、「どうしたの」と訊くと、祖父は頭を向けてこちらを見た。俺は少し驚いた。祖父が俺の言葉に「反応してくれるのは久しぶりだった。」

「鷲の寿司が食べたい」

祖父は澄んだ黒い目でこちらを見つめてそう言った。「鷲の……寿司？」

鷲とは、あの、猛禽類の鷲だろうか。祖父の一人称は「私」だったから、自分の作った寿司を食べたいという意味ではないはずだ。ハンバーグ寿司や牛カルビ寿司は回転寿司で見たことがあるが、鷲の寿司なんていうものは聞いたことも無いし、第一、鷲は食べられるものなのだろうか。

祖父は、「あれは美味しかったなあ」と言う。俺は「鷲の寿司って、何」と訊き返したが、祖父はその言葉を繰り返すだけで、返事が来ることはなかった。

ただ、目が潤んでいるせいか、祖父はいつもより少しだけ寂しそうに見えた。

家族が帰ってくるまでの間、何となく気になって、俺は家事の合間に「鷲の寿司」について調べていた。スマホで検索をかけても何も出てこない。本棚から子供用の絵本寿司事典を引っ張り出して調べたが、当然載っていなかった。

少し馬鹿らしくなって、乱暴に本を閉じて棚に戻すと、上の棚から重いアルバムが落下してきた。溜息を吐いてアルバムを手に取ると、その中の一つから、一枚の写真がひらりと落ちてきた。俺は写真を手に取った。まだかくしゃくとしていたころの祖父と誰かが一緒に写っている、泥の染みだらけの写真だった。目を凝らしてよく見てみると、こちらを見て満面の笑みを浮かべる祖父の隣に写っているのは

祖父と同年代の男性であるようだった。

そして、背景にあるのは、どうやら寿司屋だった。

俺は六歳の時、今住んでいる所に越してきた。前住んでいたのは地方の沿岸部で、震災が起こったために移り住んだのだった。震災が起こったときはまだ小さかったから、元々住んでいた場所の記憶は至って断片的なものしかない。

さつきのアルバムは、家に残っていた数少ない物の一つで、祖父個人のものだった。それを見つけたときの記憶は今も残っている。

俺は母に抱かれて、跡形も無くなった家を見つめていた。住んでいた家は瓦礫になって泥にまみれていた。そのとき家族が残ったものを探そうと戻ってきていたわけだった。母は、すすり泣きながら道路に立っていて、黙々と瓦礫をかき分ける父と祖父を見つめていた。俺は、町が無くなっちゃった、大変だなあ、と漠然と思いつながら、皆泣いているのは本当に悲しいからなんだろうな、と考えていた。

すると、祖父が瓦礫から「あった」と言っただけになったアルバムを取り上げた。「それ、家族アルバム？」と母が言葉を投げかける。祖父は、「いや、私のものだよ」と答えた。父は、落胆したようにまた作業に戻ったが、祖父はいとおしそうにそれを見つめていた。このアルバムはどうやらそのときのものらしい。

俺は、母が帰ってくると、写真を見せた。

「じいちゃんの写真見つけたんだけど、これどこか分かる？」

母は困り顔で首を傾げる。

「これ、寿司屋よね。おじいちゃんが行きつけの寿司屋があったっていうのは聞いたことがあるんだけど、どこかは分からないな。同級生がやってるお店らしかったんだけど、私は行ったことないし、今どこにあるかも定かじゃないよ」

アルバムに戻しておいてあげなさい、と言って母は向こうに行ってしまった。

帰宅した父も同様に、写真の場所がどこか分からないようだった。

俺は祖父の部屋に戻った。祖父は暖房の効いた部屋で静かに眠っていた。

『あれは美味しかったなあ』

寝顔を見ているとその言葉が思い出された。

小学校入学の頃にこちらに來たので、俺が被災地で生まれたことを知っている友人は、ごく限られた親友だけである。同世代のクラスメイトに当時のことを訊くと、停電したときや、最初の大きな揺れが來たときのことを覚えている人もいれば、全く覚えていない人も少なからずいるようだった。

俺に、前住んでいたところの記憶はあまり残っていない。家の周りとスーパ―と保育園の場所くらいしか思い出せるところはない。ましてや、そのどれも今は現存していない。しかし、生まれ故郷であるわけだから、人一倍の思い入れはある。

祖父と肩車をしながら散歩した道。バツタを捕まえて遊んだ空き地。浮き輪で泳ぎながらたくさん日焼けをした海岸。

父と母は、もう戻る気はないらしい。

学校は、冬休み前の研究論文の下調べで忙しい。ただでさえ多い基礎教科の宿題に重なるので、最近ほたらだらゲームをやっていたらられる時間も少なくなつた。昨日何とか終わらせた宿題がまさにそれで、今日は事前発表会だった。教室は暖房が効きすぎて、寒いのが好きな俺は逆に暑い。あくびをかみ殺した同級生たちが、俺の発表を聞いている。

「……以上です。最後までお聞きくださりありがとうございます。ありがとうございました」

まばらな拍手の中、席に戻り俺はため息を吐く。

「では、続きまして八代健太さん、お願いします」
担任の声に、後ろの席の同級生が立ち上がった。健太はお辞儀をして、拍手が終わるのを待って話し始めた。

「私は、地域の小さな店を支えていくのにクラウドファンディングは有効かという論題で……」
俺はシャーペンを手で回しながら健太の発表を聞く。前後の席であることもあって、最近彼は彼と話すとがよくある。お笑い担当というわけではないが、明るい真面目と言った性格で、男子には好かれる性格のようだった。

「……そこで家の寿司屋において検証を」

その単語が耳に入って俺は顔を上げた。周囲のクラ

スメイトからも、実家寿司屋なんだ、という小さな話し声が聞こえる。

健太と目が合ったので、俺は視線を逸らした。彼はメモを片手にこちらを見据えて話を続ける。俺は、彼が割烹着を着て寿司を握っている姿を想像した。眼鏡をかけ鮪の寿司を握る姿は何となく似合っている、気がする。

発表の時間が終了するなり、彼は俺の背中を叩いた。

「なあ俺の発表どうだった？ 結構話せてたよな」

「まとまって分かりやすかったよ。観客のほうを向いて話すっていうのもできてたし」

「だよな。良かった」

一回、目合ったし、と健太は笑う。

俺は思った。彼なら、祖父の言っていた驚の寿司について、何か知っているかもしれない。訊いてみようか。

話を続けようとしたがちょうどホームルームが始まったので、俺は前を向いた。

その後掃除の時間でも健太は捕まらなかった。仕方なく帰ろうとすると、昇降口に本人がいた。部活をサボってでもいるのかもしれない。彼は俺に気づいて声をかけてくる。

「あ、直人じゃん。駅まで行こうぜ」

「いいけど、もう帰るのか。今日部活じゃなかったか」

「言わぬが花って知ってるか？」

そう言っ、俺を昇降口から引きずり出して彼は歩き出すのだった。

俺は少し経って彼に言った。

「健太の家寿司屋だったんだな」

「そうだよ」

「やっぱり健太も家を継ぐのか」

「いや、迷ってるけど多分……継がないと思う。地域の人に愛されてる店だっていうことは知ってるんだけど、まだ勉強したいっていうのもあって、親も家のことは気にするなって言ってくれてるから」

健太は少し寂しそうに笑う。

「なら、ごめん。研究論文のテーマ的に、そうなのかなって思ったんだ」

「別にいいよ。俺の論文のテーマがああなのは、特

別やりたいことがなかったからだし。継がないかもしれないって言ったけど、家の手伝いは時々してるから、別に、嫌いなわけじゃない」

少しの間黙って道を歩く。俺は、訊くか訊くまいかしばらくの間迷っていたが、やがて口を開いた。

「なあ、鷲の寿司って聞いたことあるか」

「鷲の寿司？」

健太は素っ頓狂な声を上げる。

「何だそれ。鷲ってあの鷲だろ。イーグル」

「まあ、多分」

「お前が訊いてきたのに多分って何だよ。そもそも鷲って絶滅危惧種じゃん」

俺は、迷いつつ話すことにした。

「俺も聞いたことないし、食べたことないけど、じいちゃんが言ってたんだ。鷲の寿司が食べたいってじいちゃんは少し……惚けてて、どういう意味なのかは分からない。けどもし鷲の寿司があるのなら、もう一度食べさせてあげたい」

俺が言い終わると、健太はどうやら予想外のことを言われたようで、ああ、だとか変な相槌を打って黙ってしまふ。そうであるので俺は決まりが悪かった。「……いややっぱ忘れて。変なこと言っごめん」

多分無いと思うよ、鷲の寿司なんて。聞いたことも見たこともないから」

健太は沈黙していたが、少しして口を開く。

「それは直人が決めることじゃない。探し尽くしても無かったら仕方が無いけど、直人のじいちゃんが確かに言ってたんだろ。図書館で探してみよう。折角下校が早かったんだから。何か少し黙っちゃってごめん」

彼は、この後予定無いだろ、と言うと、市図書館の方向へ向きを変えて歩き出した。こんな根も葉もない話を信じてくれるのか。

健太の黒いリュックを背負った背中を見ていると、何故だか、鷲の寿司なんてものも見つかる気がした。

そして、結果として……鷲の寿司が見つかることはなかった。寿司に関する本を隅から隅まで読んだものの、鷲のわの字も見かけられなかった。研究論文が寿司に関するものであったなら、今日一日でだいぶ詳しくなれたので、健太とグループを組んだら

きっと賞を取っていただろう。

「父さんも知らないってさ」

健太がスマホを置いてため息を吐く。館内では蛍の光が流れている。俺はこの閲覧席から重い事典を棚に戻してきたところだった。

「変なことに付き合わせてごめん。明日からは、俺で探すから大丈夫。一緒に調べてくれてありがとうな」

「こちらこそ力になれなくて本当ごめん。何か見つけたら、俺も知らせるから」

帰ろう、と言って彼は席を立った。図書館は駅の近くで、俺と健太はそこまでの道のりを無言で歩く。

冬の道は、吐いた息が街頭で黄色く染まるほどに寒い。

これだけ探しても見つからないのだから、やはり鷲の寿司は存在しないものなのだろう。そもそも、偶然祖父と寿司屋の写真が見つかったから、もしかしたら本当にあるのかもしれないと思ってしまっただけで、あの写真と祖父の言葉に何か関係性があるかは定かでないのである。

駅に着くと、どうやら時間帯がちょうど帰宅ラッシュに重なってしまったようで、ホームには社会人がごった返していた。俺と健太は電車の路線と方向が一緒である。ホームに到着した電車に何とか体をねじ込み乗り込んだ。車内は外と打って変わって蒸し暑く、汗が出る。前に抱えた鞆からスマホを出すこともできない混み様だった。社会人は大変だ。

俺は諦めて車内を見上げた。温泉地の広告が揺れている。寒い季節だから温泉に入って温まりたいという人も、少なからずいるのだろう。それで電光掲示板の上の広告を見た。俺の住んでいた町が、広告を出していた。

「今が旬」の文字が見える。

そして、そこには赤貝の寿司の写真が写っていた。

(あ、鷲だ……)

俺はすぐにそう感じた。

思い込みなどという考えは一切浮かばず、その時の俺には、それは紛れもなく鷲に見えた。鷲が風切羽をなびかせ、その体を広げて悠々と大空を飛翔している姿。暁の陽光を浴びて海上を滑空する姿が、情景として不思議と俺の頭に浮かんだ。

「健太、あれ」

俺は小さく名前を読んで彼の背中を叩く。暑そうに振り返った彼は、俺が指さす方向を目で追うと、やがて真顔になる。

「確かに言われたら驚に見えるけど……あれは、赤貝か」

俺は広告を読んだ。「震災で被害を受けた赤貝は日本一へ再興中」といったことが書いてある。「柔らかい中でも弾力がある高級品」の文字が目に入る。

祖父の行きつけの寿司屋、故郷の名産品、笑顔。すべてが繋がった気がした。

家に帰るや否や、俺は故郷の赤貝について調べた。震災によって漁師たちの自宅も船も流されてしまったこと。風評被害を受けながらも奮闘してきたこと。日本一の赤貝として揺るぎない位置に君臨していること。

生まれ故郷だというのに、俺は名産品である赤貝の存在を全く知らなかった。父と母も昔のことについて多く語る事が無いから、俺も無意識に、その話題に触れないようにしていたのかもしれない。

するとそのとき、通知音が鳴ったのでスマホを手にとった。健太からメッセージが送られてきていた。『父さんが気になってるから見せてくれないかって頼んだ写真、あれに写ってた人、父さんの知り合いらしい。ポランティアのときにお世話になった人だって言ってる』

俺は驚いて思わず立ち上がった。部屋のそばで寝ている祖父を見る。祖父は賭け事では負けなしとしてブイブイ言わせてきたらしいが怖いぐらいに幸運な偶然だ。

『今もあつちに住んでて住所も分かるって』
現在祖父は七十代であるから、向こうもそれくらい年齢のはずだ。

俺は立ったまま考えた。祖父が食、べたいと言った「驚の寿司」は、本当に赤貝のことなのか。また、それは懇意にしていた寿司屋で食べたものだったのか。

俺の頭の中には、祖父の知り合いを訪ねるといって考えが起こっていたのだ。

もうすぐ冬休みで、時間もある。貯金もある。行

こうと思えば俺は行ける。祖父のアルバムを撫でる手と瓦礫の町、赤貝の寿司を順に思い浮かべた。

そして、俺は十数分逡巡した末、健太に『住所、教えてほしい』と返信した。

金を引き出し計画も立て終わって、俺は鞆に適当な荷物を詰め終わり、自分の部屋を出る。決意が揺るがないうちに、と数日のうちに準備して、冬休みに入った今日、俺は故郷を訪ねようとしていた。朝に家を出て、その日のうちに帰ってくる弾丸計画。祖父の知り合いを訪ねるだけであるので、自分では無理はないように思われた。

俺は玄関ドアに手を掛ける。

「直人、どこ行くの？」

振り返ると母がいた。俺は、両親に故郷を訪ねることを言っていないなかった。

「友達と遊びに行くんだよ。夕方には帰る」

向き直ってドアを開けようとすると、母が言う。

「お金引き出してたでしょ。どこか遠いところ行くんじゃないの」

俺は内心動揺した。どうも母は鋭くて困る。

「おじいちゃんの写真を見つけたのも、アルバムを見てたからなんじゃない。ねえ、前任でたところに行くつもり？」

「……そうだよ」

半分母を睨みながら振り返ると、ゴム手袋をはめた両手を組んで、エプロン姿の母はため息を吐いた。

「行つてどうするの。戻るとでも言うの？ 何をしに行くの」

俺は言葉に詰まる。母に本当のことを言うつもりはなかった。これは俺とおじいちゃんの問題であつて母さんには関係ない、というプライドのためだった。もしかしたら反抗心からだったかもしれない。

「何だっつていいだろ」

段々と、俺の怒りが募ってくる。

「そんなわけないでしょ。私だつて直人のこと心配なの」

母は困り顔でこちらを見た。

「行つたからって何があるわけでもないし」

その言葉を聞いた瞬間、俺の中の何かが切れた。

うるさい、と叫んで、乱暴にドアを開けて外に出

る。駆けだす背中に、直人、と大きく自分を呼ぶ声が何回も覆いかぶさる。ドアは開けた勢いで、開いたまま固定されてしまったようだった。その言葉を振り払うように俺は走った。冷たい風が頬を切る。悔しかった。母の言葉が、俺の幼少期を全て否定しているようだ。保育園の友達との思い出も、祖父との記憶も、あの町も、俺が共に過ごした大切なものなのに。

また、悲しかった。母が故郷を無いものとして見ないようにしていることが。自らの欠点としてしまっていることが。俺にとってかけがえのない場所なのに。

父は何と言うだろうか。母と同じように俺を引き留めるだろうか。それとも黙って行かせるだろうか。祖父なら、何と言っただろう。

俺はただ、もう一度じいちゃん的笑顔が見たいだけなのに。

新幹線からローカル線に乗り換えて、家を出てから三時間ほど経つ。

俺は、母に言われたことを反芻しながら、かなりむかむかした気分了新幹線に乗っていたのだが、途中から、よく考えれば祖父の知り合いに会ったところでどうするのか、という考えに至り、健太と他愛もないメッセージをやりとりしながら気を紛らわせていた。後先を考えないという行動原理に俺も嵌っていたらしい。これが若気の至りとかいうやつだろうか。

ローカル線を下りて、俺は最寄り駅に辿り着いた。駅は津波の被害を受けなかったという話を前にどこかで聞いた気がする。構内から出てあたりを見回すが、薄ぼんやりと覚えていた駅前の風景とはかなり違っていたことに、変なよそよそしさをおぼえて、少し悲しさを抱いた。

健太に教えてもらった住所は、歩けなくはない距離であったので、俺は徒歩で行くことにした。祖父の知り合いは、健太の父さん曰く、紀文さんという名前で、数年前に震災以前に住んでいた場所に戻ってきたらしい。駅周辺は、新築の綺麗な建物が多い。海の方へと続く大通りを歩くと、道の形だとか繋がり方は俺が記憶で思い描いていた通りのもので少し

懐かしい気持ちになる。また、見覚えのある看板を時々見かけることもあった。

スマホの地図で経路を調べながら、道なりに進んでいくと、段々と整備されている空き地が増えて来た。田んぼの中に点々と新しい建物が生えている。やがてその建物も数を減らし、広い土地のみが広がるようになる。俺の家もこのあたりにあったはずだが、もうどこだか分からない。

俺は足を止めて辺りを眺めた。吐いた息は白く口から震え出る。

今も復興への道を歩んでいる場所。この道を、家族が津波から逃れるために逃げたはずだ。

俺は津波のことをよく覚えていない。だから、ニュースで流れて来る映像のほうが、実際の記憶よりも鮮明に、震災のイメージとして強く残っている。保育園の友達や、近所の住人が飲み込まれた波を、高台で撮られた濁流の動画から聞こえる悲鳴を、俺はこの耳で聞いていたのだろうか。

しかし、俺は別に、ニュースの報道を悪いこととは思わない。そういうメディア報道に限ったことではなく、所謂「震災を経験していない世代」が自分の意見を述べることも重要だと、俺は考えている。経験した過去は消えないし、その過去を経験した人もやがて途絶えてしまう。だから、大事なことや、忘れてはいけないことを、当事者でない人たちが伝えていく勇氣も必要になるのだ。

アプリが経路案内終了を告げた。顔を上げると、住宅群の中に、こじんまりした寿司屋がのれんを掲げていた。その店名は、祖父の写真にあったものと同一である。

俺は、どういう会話をするか脳内で筋道立てた後、店の戸を開けた。

「いらっしやいませ」

笑顔を向けてくれたのは、母と同年代の女性だった。「こんにちは……皆城直人という者です。酒井紀文さんという方を探しているのですが」

「え、父ですか？」

「はい、お話ししたいことがあってお伺いしました」少々お待ちください、と言って、女性は困惑したように店の奥へ消えて行った。見知らぬ高校生が、アポなしでいきなり老人を訪ねて来るのだから、無理

もない。

事前に健太の父さんに電話を入れてもらえばよかった、と考えていると、女性が「どうぞ」と店の奥に通してくれた。店は家でやっているものらしく、家庭的な廊下を歩く。案内された先はリビングだった。あの写真よりも幾分か皺が増えた男性が、椅子に座っていた。

「初めまして、紀文さん」

男性は俺の姿をみとめると、顔をほころばせて笑い、隣の席をすすめる。

「直人くんだね。初めまして。名前を聞いて思い出したよ。よく皆城……いや、源太が話していたよ、可愛い孫がいるんだって」

紀文さんは祖父の名前を出し、俺をまぶしそうにみつめた。それから、源太とも最近会ってないな、と呟く。俺は少し複雑になる。紀文さんは今の祖父を知らないのだろう。

「それで、僕に用があるってということだけど何で来たのかな」

「祖父が話していたことについてお聞きしに来ました」

俺はそこで一呼吸置く。

「鷺の寿司、ってご存知ですか」

紀文さんは、鷹揚に頷いた。

「知っているよ。僕が握った赤貝の寿司を、源太が名付けたんだ。言われたら分かるぐらいの微妙なネーミングだなとその時は思ったけれど、後から考えてみると結構良いセンスだったんじゃないかな。鷺なんて格好良いからね。仲間内の暗号みたいなものだよ」

俺は紀文さんがそう語るのを聞き安心する。しかし、紀文さんは首をかしげる。

「でも、それは源太に直接聞けば分かったことじゃないか。教えてくれないなんて意地悪してるのか、あいつは」

紀文さんは微笑んでいる。

「……鷺の寿司という単語を聞いたのは、祖父のうわごとです。祖父は今寝たきりで、少し前に言うのを俺が聞きました」

紀文さんは段々と表情を無くしていった。それで、しばらく黙って、そうか、と呟いた。

「中々連絡が無いと思ったら、そんなことになっていたんだね。あいつもそういう歳か」

俺は、その表情を見て少し躊躇ったが、決心して口を開いた。

「それで、俺個人の勝手なものにはなるんですが、お願いがあるんです」

紀文さんは、「何かな」と言っただちらを見上げる。

「赤貝の寿司……鷺の寿司を、もう一度祖父に食べさせてあげて欲しいんです。祖父は、鷺の寿司を食べたいと言っていました。美味しかったと。祖父が食べたいと言っていたのは、ただの赤貝の寿司ではなくて、紀文さんが握った鷺の寿司なんです。どうか祖父のもとへ来て、寿司を握っていただけませんか」

言葉紡ぎながら、俺の頭の中ではずっと、幼い頃に見た祖父の笑顔が巡っていた。

それで俺は最後に付け加えた。

「もう一度、祖父の笑顔が見たいんです」

お願いします、と俺は頭を下げる。少しして小さなため息が聞こえた。

「そのためにわざわざここまで来たのか」

俺は躊躇うが、はい、と答える。紀文さんは「参ったな」と言った。

「孫に來られちゃ、断りようがないじゃないか」

顔を上げてくれ、という言葉に俺がしたがうと、紀文さんは眼鏡を外して目尻を拭っていた。

「もう長いこと会っていないからね。会いに行くよ。ここまでは一人で来たのかな」

俺が頷くと、紀文さんは笑う。

「その行動力はきつと源太譲りだね。あいつも後先考えずに突っ込んでいくところがあつたよ」

何かごちそうするよ、と、紀文さんは立ち上がった。

俺はその日の夕方に家へ戻った。帰りの新幹線代は、紀文さんが支払ってくれた。晩御飯の食卓では母はいつもより口数が少なかったが、父が場の雰囲気を取り繕うように根気強く喋ってくれていた。母から俺のことを聞いたようで、味方してくれたらしい。ただ、紀文さんが一週間後に祖父に会いに来ると言ったときには目を丸くしていた。

また、健太の父と健太にお礼に行くと、彼も思う

ところがあつたようで、論文のテーマ変更しようかな、などとぼやいたものだから俺は少し心配になったのを覚えている。

そして、今日がその約束の日だった。紀文さんは、健太の家に寄つてよもやま話をしてからこちらに来たようだった。

「ああ、初めまして。源太と仲良くさせてもらつていました、酒井紀文と言います。お邪魔してすみません」

いえいえとんでもない、と頭を下げ合いながら紀文さんを笑顔で奥へ通す母は、やはり少し動揺している。紀文さんは俺を見て言う。

「赤貝を向こうから持つて来たよ。良いのが入ったから」

部屋に通された紀文さんは、久しぶりだねと言いながらゆつくりと優しく祖父の手を握った。祖父が紀文さんを見返すことは無い。

「僕の握った寿司が食べたいんだってね。君の孫から聞いたよ」

それで、返事を待つかのように間を開けるとゆつくり立ち上がった。

「台所をお借りしても良いですか」

そうして紀文さんが祖父のもとに持ってきたのは、俺が電車の中で見た、まさに驚の寿司に他ならなかった。祖父は歯がしっかりしているから、こういう魚介類であれば食べられる。

紀文さんが、祖父の口元に小さくした寿司を運ぶ。

祖父が口を開けた。寿司を口に入れて閉じる。ゆつくりと噛む。

そして、徐々に顔をほころばせた。部屋の入り口に佇んで見守っていた母と父が、息をのむ音が聞こえる。祖父は、ゆつくりと食べ物を咀嚼しながら微笑んでいた。

その皺に包まれた笑顔に、小さいころに見た思い出の笑顔が重なる。

「おいしい」

祖父は目に光をたたえてそう言った。紀文さんは笑顔で「そうか」と震える声で言う。母がすすり泣きしゃがみこんだ。紀文さんが、おいしいの、ともう一度聞く。祖父は柔らかくうなづく。

ああ、笑っている。祖父が、あの日の笑顔で。俺

はその微笑みを脳裏に刻み付ける。柄でもなく、無意識に涙が出てくる。

祖父の言葉と、友人との根気と、紀文さんの友情と、故郷の努力が重なったのだ。

赤貝の寿司は驚の寿司となって、祖父に笑顔をもたらした。

祖父の笑顔は、一羽の鷺の飛翔がつかないものだ。つた。